

# 下商物語 (その十二)

## 下商に女子が入学した頃

寄稿 藤井 繁子 氏

男子商業学校は「戦時非常措置」で工業学校に転換することになり、多くの商業学校が姿を消した中で、下商は女子を入学させることで商業学校としての存続がかなうことになった。そこで、昭和十九年四月下商にはじめて女生徒が百名入学することになり、下商女子部一期生と呼ばれたが、世間では「男の学校に女が入った」と驚きの目で見られた。

男子商業学校は「戦時非常措置」で工業学校に転換することになり、多くの商業学校が姿を消した中で、下商は女子を入学させることで商業学校としての存続がかなうことになった。そこで、昭和十九年四月下商にはじめて女生徒が百名入学することになり、下商女子部一期生と呼ばれたが、世間では「男の学校に女が入った」と驚きの目で見られた。

所・鉄道管理部・日本通運に、更に市内だけでなく名古屋方面まで行って作業に従事している。在校生は運動場を耕しサツマイモを植えたり、防空壕を掘ったり、警報が鳴ると避難するという状態だった。秋の収穫期には農家へ勤労奉仕に出かけ、また、今の大学町辺りにあった田んぼで田植え、田の草取り、稲刈りなど農家の労働を一通り経験した。

二十二年四月生になった時、市立下関女子商業学校(二十年に校舎全焼)が廃校となり、生徒二百八十名が下商に移籍し、それぞれ学年で一緒に勉強することになった。四年生は、智組・信組に和組が加わり、この時本格的に勉強したように思う。

二十三年三月の卒業式は異例のものであった。というのは、学校制度の改正で現代の633制に変わったからである。十八年入学の男子は五年制で百九十二名卒業(内九十六名は二十四年に高校卒業)、十九年入学の女子と女子商から移籍した生徒百四十八名は四年制で卒業(内十一名は二十五年に高校卒業)、二十年に入学した男子・女子・女子商から移籍した生徒三百四十五名は併設中学校卒業(二十六年に高校卒業)の三学

生徒は、その看護に当たることになり、包帯の取り替えや洗濯などを手伝った。日が経つにつれ患者さんの傷がただれ膿が出たりしていたが、つける薬もなく、よくみると蛆がわいていた。

年にわたっての卒業式が挙行され、社会に出た人もあり、( )で示したように更に学業を続けた人もいた。この三学年の中で、十九年に入学した同級生男子百五十名は四年制度下で入学したが、終戦後は旧制の五年制度に戻った為に二十三年三月の卒業とはならず、そのまま新制高校二年に編入し二十五年に九十四名が卒業している。二十五年の卒業を待たずに二十四年に卒業した二十五名は、五年制度の扱いであった。同期の女子は、四年卒でもらった「市立下関商業学校」卒業証書と、新制高校の「下関商業高等学校」卒業証書と二枚持っているが、男子は下商に六年間通って高校卒業証書のみである。同学年の者が同じ学校の中で、三カ年にわたって卒業したことになる。

時、二十一年入学の女子がいたので途切れずに女子の歴史が現在にまで続くことになった。

新制高校になってからは学校の空気は一変。衝立も取り払われ名実共に男女共学でホームルーム制がとられた。二十四年はホームルームティチャーを生徒の方から選び、朝礼でホームルームに集まって点呼があり、後は授業道具を持って各教室を移動して授業を受けた。

旧制と新制との狭間で送った学校生活は、明日がどうなるかわからない何とも複雑なものであった。

執筆者紹介  
藤井 繁子  
昭和二十五年本校卒  
(女子部第一期生)  
本校同窓会常任理事  
いけばな小原流下関支部参与  
小原流山口県連前会長  
本校で昭和二十九年から平成三年まで国語科教諭として、以降平成十八年まで日本伝統文化(華道)担当として勤務されました。